



### 顕微鏡と施肥船と 海の男たち

—八代郡文政漁協青壮年部の活動—

の山鹿牧場の管理を委託されている一人である。牧場管理といっても、毎日通勤し、しかも給料を貰っているいわば酪農サラリーマンなのである。  
純二君の出動はいつも朝の六時。第一回の搾乳がこの時刻にはじまるからである。朝まだきの山道を単車で思い切りふっ飛ばすその快感は堪えられない。牧場の入口にはきままつて牛たちが首を並べて彼を待っている。  
小岩井農場で酪農の修業  
ところで井君はつい先頃、岩手県にある小岩井農場の長期酪農研修を終えて帰ったばかりである。小岩井農場とは民間経営の大規模農場で、経営方式がすべて近代的で先進的農場として有名。この農場と熊本県酪農会と地元産山村が提携して熊本県の若い酪農後継者の依託研修制度を創設したのが昨年の四月。全国でも稀な試みだがこの第一回研修生(二一名)の一人として彼は選ばれたわけ。研修費用は県酪農会と役場が一切負担してくれた。

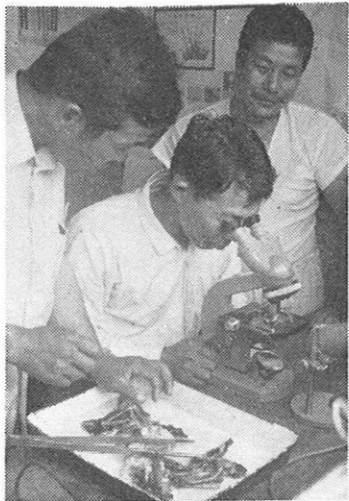
小岩井農場での一年間の研修はきびしかった。だが何よりの収穫は、仲間がたぐさん出来たことだ。井君と同じ志に燃える若者たちとの交流の中で彼は酪農への確信を固めることができた。  
さて、現在の彼の仕事は、充足まもない組合牧場を軌道に乗せる作業の一端をこなしているわけだが、牧場の主任である先輩格の高橋さんの指導を受けながら責任分担の枠も徐々に拡げられていっている。そして研修で身につけた知識も少しずつ役に立っている。組合員総出で行なうサイロ作業では、牧草の貯蔵時期や方法など井君の助言がかなり役立った。  
牧場にはいま、トラクター、ヘイベラー(乾燥収穫機)、テクター(刈った草を反転させる機械)、モーター(刈草機)などの農業機械が揃っている。これら機械の管理も彼の仕事のひとつだ。これに一番気をつかうのが牛たちの健康管理である。牛の病気で多くかかりやすいのがヒロプラズマ病(ダニ熱が出る病気)、四

〇度以上の熱が出ると牛は全然食欲をなくしてしまう。こんな時、井君はすぐ獣医に連絡をとり措置を講じなければならぬ。要は、病気の牛を直感で見わけることがだが「毎日こうやって牛たちと一緒に暮らしている」と意外とよくわかるもんで「と彼はいう。  
×  
草原をわたる風はいつも肌にかい。三鈴の広さの牧区がいくつもあって、牛たちが草を食べてしまおうと隣の牧区に移さなければならぬ。牛たちは、新しい草を求めて隣の牧区へ足早やに移動していく。空がよく晴れた日には九重や阿蘇の山々がクッキリと手に取るように見える。岩手の小岩井農場で一緒に学んだ仲間から時折ではあるが激励の便りが飛んでくる。「新しい草地酪農」にかける夢と期待は果しないものがある。  
酪農王国ともいべき阿蘇の大草原こそ「わが人生の試練場なのだ」と井君は強く自分にいい聞かせるのである。

不知火海のノリをつかもう  
「こらあ成育のよかばい」。顕微鏡をのぞき込んだ文政漁協青壮年部長の片山茂雄さんの頬がゆるむ。次々に大きな掌で糸状体のついたカキガラをピンセットではさみ、顕微鏡でのぞく部員たちの手つきは、お世辞にも器用とはいえないが、この平均年齢三〇才という潮風に焼けた部員たちの囲りは、ひたすらノリの増取にかける意欲と自信がむんむんとたちこめている感じだ。  
それもそのはず、この海に生きるたくましい面々の働きかけが、不知火海全域に広がるうとして、これまでに類を

みない大規模なノリの粗植化と共同施肥の導火線ともなり、見事な成果をあげたのだから。これは、今年の二月、東京で開かれた浅海養殖研究発表全国大会でも出席者に大きな反響を呼んだものだ。  
昭和四十一年度、不知火海域のノリ養殖は大変な不況に見舞われた。その前年度には文政漁協全体で一、〇〇〇万枚を越える生産を上げたものが四十年には不知火全域に「リゾソレニヤ」という珪藻の大発生で、文政漁協の生産枚数もわずかに二八万枚と激減した。  
あまりの打撃に「ノリ養殖は恐ろしか」と尻込みする人もあらわれた。しか

し「俺たちからノリばとったら何が残る」と部員たちは普及員をまじえた現地検討会を繰返す内、まず、漁場の生産力をつかむことが先決と、鏡漁協の青壮年部と協力して、ノリ研究所に漁場診断を依頼。その結果、不知火海は波静かで潮流が緩慢であること、栄養分が海水一リ中に一〇〇分の必要なのに、一三〇分の少ないことが指摘された。  
ドライな広域施肥があたる  
文政漁協の青壮年部が、潮当りをよくするため、ヒビ面積一に対して漁場の使用面積四の割合を、二倍の八にする漁場の粗植化と、肥沃化にとりくんだのは勿



★自慢の顕微鏡をのぞく部員たち

論だ。  
しかし、この仲間たち、海に生きるだけに考えるスケールも大きい。不知火海全域でやれば、効率もよいし、海域のノリ養殖にたずさわる全部の人の利益にもなる。不知火海全域の粗植化と施肥を呼びかけた。文政漁協のバックアップも大きな力となって、ノリ建て込み規制は海域全体に及んだ。そして施肥対策も、竜北から昭和に至る五組合の一斉施肥に成功した。  
なにしろ、漁場の肥沃化は、単にノリに施肥するというよりも、漁場の海水全体を肥沃にするのだという、部員たちのとてつもない豪快な考え方に、首をかしげた組合員がいたというのも無理はない。しかし、その人たちも実際にノリ

の色つやが良くなり、成長が早いなど、その効果を目の前にみて、次の施肥は何日にするかと次々に組合に尋ねてくるようになつた。この時はやはり九隻の船で四五人の全部員が、汗と肥料にまみれて漁場に肥料を撒いた苦勞も無駄ではなかったと、いかつい体を子どものように抱きあって喜びあつたという。  
四十一年度は、生産枚数も文政漁協で六一〇万枚に回復。有明海沿岸でもこれに刺激されて四十二年の広域施肥が既に打ちだされているという。文政漁協の青壮年部が落とした一つの水滴が、今や大きな波紋を描こうとしているのだ。  
モットーは「科学的ノリ養殖を」  
この例からもわかるように、部員たちの動きは活発だ。三十八年と三十九年には、それまでカンに頼っていたノリの種付け水位や、赤くされ予防水位を科学的

に知るために、九基の水深棒を漁場に設置。同じ三十九年秋には、熊本県で最初に施肥防除船を導入。また、小組合ごとに顕微鏡をおき、部員が普及員とともに毎月一回組合員の家を訪問、糸状体の個人培養の適正化を図って、種付け時期まで順調な培養管理が行なわれるよう指導するなど、事例をあげたらきりがない。  
部長の片山さんの「技術を停滞させない。伝統の上にあぐらをかかない。これが私たち部員のモットーです」ということはの通り、部員たちが集まると、もっぱらノリを如何にして多くとるかに議論を闘わせる。  
漁協の桑原参事も言うように、漁協と直結して、組合員の手足となって動きまわる部員たちに、組合員たちが寄せる期待は限りなく大きいようだ。

### 田園に流れるメロデー —菊陽ブルーヤング ファーマーズの面々—

大山 繁  
(県農協中央会次長)

人はよくきれいに咲いた花をみて美しい、素晴らしいとほめる。  
しかしその花にも黒く汚れた根があることを知る者は少ない。  
その根は、日夜きれいな花を咲かそうと頑張っているのだ。  
私は、きれいに咲いた花をほめる人よりもその根の日頃の努力に拍手する人になりたい。

日焼けした顔、土に汚れた手がこの詩をよみ、この詩を書いた。この同じような顔と手をした若者が八人、これ又器用にも、ギターを、マンドリンを演奏している。  
毎週、月曜日と木曜日、菊陽村の産業館は、夜九時から真夜中まで、リズムに乗った彼ら若者達に占領される。彼等と

は、菊陽ブルーヤングファーマーズである。田中健郎君(二三才・マンドリン)、大野勝彦君(二三才・電気ギター)、吉山勝利君(二三才・ギター)、森田勝元(二三才・ベース)、矢野一郎君(二〇才・ウクレレ)、梅田国雄君(二〇才・ギター)、上村幸男君(二二才・マンドリン)、島田誠君(二二才・スティールギター)いずれも二鈴から三鈴を耕する農家の長男坊で、農業高校や伝習農場を出ている。  
タフで陽気な音楽野郎たち  
このグループは、二年前に村の青年学級のギタークラブとして発足した。  
はじめは、二〇人を越えるメンバーがいた。しかし、結局八人だけが残った。そして残った八人は五百円、千円の小遣いを、毎月出し合って、楽器を買いたし

て、現在のめずらしい編成のバンドが出来た。  
いずれも、二〇才から二三才の若者である。だから親父は、口では半人前のあつかいしかししない。しかし、人一倍こき使う。だから仕事はめっぽう忙がしい。  
朝は六時半には起される。しかし八人のメンバーは誰もが「俺が欠けたら、みんなが、さびしかろう」と、欠かさず練習には参加する。  
耕耘機を握る手は、時々練習をしないとゆうことを、きかなくなるからだ。たしかに、音楽が好きだし、タフだからでもあろう。おかげで、今では、四〇曲近くを、マスターした。  
去年の、クリスマススイブには幼稚園に呼ばれて、かわいい後輩と遊んだし、三十年に一度の村祭にも参加し、色をそえ